

第4章 南方熊楠「萃点の思想」と「事の学」⑨

元おやさと研究所長
井上 昭夫 Akio Inoue

第九節「船遊び」「事化」の思い出

ヴィクトリア湖はダーウィンの「生物多様性の宝庫」として知られる世界第2位を誇る巨大な淡水湖である。沿岸に沿っては漁村がおおく、農業だけでなく漁業で生計を立てている貧しい人もおおい。わたくしが視察した時には、漁船の数も不十分で、ケニア、ウガンダ、タンザニアの3カ国に面しているこの湖に客船は一艘しかなく、いまは沈没して運航していないと言う惨状であった。そこで立ち上がった幻想は、『逸話篇』の168「船遊び」の「一度船遊びしてみたいなあ。わしが船遊びしたら、二年でも三年でも、帰られぬやろうなあ。」という教祖の海外伝道を思わせるお言葉と、宇宙船も「船だ」という着想であった。

この直感は、当時「こうき話」に見られる裏守護星象の天文学的研究や、生命生態学者三木成夫が胎児の解剖を通して証明して見せた感動的な人体発生学、つまり人類の個体発生は原始水に浮遊する魚のようであり、羊水の中の魚として胎児の「遊び」の面影を見せているという知見が背景にあったのかもしれない。しかし、直截的には1959年の青年会総会で二代真柱の言葉がわたくしの魂を動かしたようだ。それはこういう意味のものであった。月面にはじめて人類が着地するアポロ11号の話に触れて「時代は人類が月に到達するようになった。あらきとうりょうのなかで、よし将来月面基地で伝道をやってやろうかという気迫を持つ天理青年はここにるか」という意味の表現で発破をかけられたことは、強烈な「理不思議」をもってわたくしの胸を突きぬいたのであった。

その15年後の1985年、1年後に執行される教祖百年祭を記念して開催する「コスモス・生命・宗教—ヒューマニズムを超えて—」と題した国際会議の天理でのプレセッションに、講演者としてアポロ9号のラッセル・シュワイカートを招聘するため、アメリカ巡教の合間をぬって今シアトルにいと聞いた氏の自宅に電話をかけ、氏の家まで出かけ、彼の来日を説得したのである。その返す手でモスクワのシュワイカートの友人マカロフ宇宙飛行士に電話をかけ、二人を日本で会わせて、広島原爆記念公園に完成した国際会議場の竣工記念に「Only One Earth」というテーマで関係諸団体の協力を得て国際会議を開いたこともある。その後、アポロ12号で月面着地を果たしたコンラッドやアラン・ビーン、そしてその母船で月を回周したゴードン宇宙飛行士など、十数名の各国の宇宙飛行士を天理に案内し、日本各地でシンポジウムや対談などを企画・実践した。

ちなみに宇宙を飛ぶ人工物体は「宇宙船」と呼ぶべきか「宇宙飛行機」と呼ぶべきかで当初は議論があったらしいが、浮遊するという両者の類似性が「船」という言葉におさまったと聞いた。そうであるならば少なくとも船外活動の日本人宇宙飛行士は「宇宙鳶職」という名称にすべきだと、わたくしはゴードン宇宙飛行士基調講演の日鷹連創立30周年記念シンポジウムで主張し、記者会見を行った時にその提言が翌日の新聞に掲載されたこともある。宇宙船外活動においては、英語では「space walk」というが、日本語では「宇宙遊泳」という。日本語が宇宙的にはより正確な表現であろう。重力や上下前後左右のない宇宙では「歩く」空間は存在しない。したがって教祖の「船遊び」は限りなく遠大で「宇宙船遊び」を包摂しているとも解釈できるわけだ。「陽気遊び」ということばが示唆するように、ともに本教教理のキーワードの一つは「遊」ということばである。「遊び」(ホモ・ルーデンス)という概念が、今やスポーツだけではなく、深みを示す宗教思想となったのである。事実、コンラッドが極軽重力の月面で飛び跳ねているとき、どのように感じたかと聞くわたくしにむかって、I felt really joyous! (わたしは大変陽気な気分になった)と言った時には大変驚いた。『逸話篇』の「船遊び」という教祖の何気ないお言葉から、地上から遊離して垂直に天に向かう魂の浮遊を伴うかのような不思議な感覚が啓発させられたからである。

わたくしがウガンダの漁業現場を見て、まず漁船のほとんどがつぎはぎだらけの手作りの木造船で、持続力がないことに気が付いた。FRP船と見えた白びかりした船は、国外から貸与された政府の小型警備船だけである。FRP船とはfibered-reinforced plastic船の略で一般に樹脂でできた船舶を指して使われる言葉である。ところで、FRP船の外皮の部分は廃棄物として処分されるが、これは廃プラスチックという産業廃棄物である。したがって、その処分は廃棄法の規定に従わなければならない。廃船を漁港から別の場所に陸送し解体するには法的にも複雑で手間がかかる。その分、漁船所有者に余計な負担がまわってくる。たとえば、北海道最北端に位置する礼文島の漁村などは、あと数年もすれば廃船の墓場になると憂慮されている。漁船所有者は今なら謝金を出すから使用中のFRP船をもらってほしい、その方が将来処分するより安くつくと言う。

そのような次第で、わたくしは盛んに日本製中古車が発展途上国に輸出される実情に学んで、船外機付きのFRP中古船を内陸湖の多いアフリカ大陸に輸出し、貧しい漁村の自立支援にリユースできないかと思いついた。コンテナ運輸が可能な港まで船外機エンジン付きの小型漁船を苦小牧港から陸送し、ブリッジを取り除けば帽子を重ねるようにFRP船5艘は40フィートのコンテナ1台に積み込めると算段した。わたくしは、ウガンダ政府と交渉し、政府がコンテナに入る中古船の運搬に関する費用を支払うというところまで交渉が進展した時点で、突然ケニアの大統領選挙後に騒動が勃発し、モンバサ港が閉鎖され、鉄道も破壊されて、この計画は頓挫してしまい、まずヴィクトリア湖に40フィート余りの伝統的木造船を作ることに計画を変更したのであった。ところが石油の異常な世界的値上がりが影響して、造船より高価な船外機エンジンをつける余裕がほとんどなくなってしまった。ならばダウ船に学んで手漕ぎをかねた帆船の設計ができないかと考えなおした。しかし、ヴィクトリア湖にはダウ船使用の歴史がない。そこで帆船ホクレア号を再現し、ハワイから日本に航海したことのある旧知のハワイ大学海洋人類学者ベン・フィニー教授に連絡を取り、帆船の歴史と造船の仕様に関する文献を入手し、今度は帆船の研究に首を突っ込むこととなった。夢は湖上を駆け巡るが、以上のような試行錯誤を経て、究極の貧困漁村の自立支援という「谷底せり上げ」を目指し、ヴィクトリア湖に自力で「天理丸」を浮かべる「船遊び」の準備に入ることに落ち着いた。ふしぎにもヴィクトリア湖畔にある五十嵐仁天理教男能富分教会長が設立したキグング集団所の一寒村において、伝統的船造りの技術を伝承するウガンダの一人の船大工に出会い、意気投合し、懸案のアフリカ国際プロジェクトに思わぬ加速度がついたのである。

長さ10メートル余りの漁船は2008年遂に完成し、地域の名士や関係者を招いて進水式をおこなった。天理丸の船首には教旗と、赤い座布団の上に『逸話篇』の日英語による「船遊び」の頁を開け、十数人の青年や孤児たちを乗せて、貧しい漁民のひしめく島全体があばら家トタンで覆われたように見える岩だらけの小島にたどり着き、日本より持参の浄水器で湖水を手動で浄化して、ビニール袋を持って並ぶ婦女子たちに与えて喜ばれた。夕刻近くになって天理丸は湖上で一時停止し、竹製の釣り竿で大人も子供もテラピアを一所懸命に釣り上げた。そのお初のテラピア1匹は、その日の夜に燻製してもらい、翌朝出発の飛行便でおぢばまで持ち帰り、存命の教祖にアフリカにおける「船遊び」の証しとしてお供えをさせていただいた。天理丸はその後船外機エンジンを与えていただき、子供たちの本土での学校通学の往復や、貨物船、釣り船として3年間にわたり活用されていたが、船底板が劣化して残念ながら今は廃船となったと聞いている。再生を祈るや切なるものがある。このようなヴィクトリア湖の惨状を前にして、熊楠ならばいかなる行動を起こすであろうかと考える「事」しきりである。